

授賞理由 (第9回)

竹原義二氏の作品には「もの」「場所」に対する強い関心とともに、自然と環境に対して「開かれた場」としての建築、すなわち「生きた建築」づくりが通底している。また建築の部分と全体はそれぞれが独立し、なお有機的な統一をもってみごとな住空間を創出している。それは建築材料を「生かす」工夫を徹底的にすることによって、その成果が作品に表現されているとあってよい。とりわけ土佐漆喰本塗りなどの左官仕上げ、天井梁型の栗材のなぐり仕上げなどの木材の取り扱い、コンクリートの仕上げにおける伝統的な手法などを現代につなぐ努力がみられ、きめの細かいディテールは押しつけがましくなく、自然で暖かく、ヒューマンな空間を創りあげている。そして作品全体に、すぐれた感性が行き渡っている。この感性は、竹原義二氏が生きてきた関西の風土に負うところが大きいと思う。作品は強い自己主張をせず、常識的であり、開放的である。しかもそれでいて、存在感を失うことがない。そのバランス感覚のよさは抜群である。

「鴻ノ巣の家」は、紀州田辺湾に面した開発分譲別荘地に建つ。敷地は急勾配の斜面地であり、砂礫、風化岩の地質だが、設計者はこの地勢と眺望を巧みに設計に取り込んでいる。平面は囲み庭に循環性のある回廊を巡らし、さらに高低差を利用して、分散する4家族の「室」をうまくまとめている。また4家族集合のための家族室は、賑わいと静謐さを両備した、質の高い空間となっている。この平面構成は建築材料やディテールとうまく一体化し、光と影の交差とともに空間に深みをあたえている。

こうした空間と材質感の深みが竹原義二氏の作品の特徴であり、すぐれたところであるといえる。関西のよき伝統と感性を受け継ぎ、しっかりと地についた日本建築の本筋を歩んでいる姿勢は、現代ではむしろ清新であり、村野藤吾賞に相応しい。